



241号
2019/3

日中文化交流市民サークル'わんりい'
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp2018/7/1



市場の肉屋:中国四川省ガンツォー・チベット族自治州丹巴県の市場で働く肉屋の女将さん。地元農家育成の豚肉を扱っている。価格は成都より5割程高いが、丹巴の人達は地元産を好んで買う。毎年冬の初めには高地放牧のヤクの肉を売り、委託されて豚やヤクの干し肉も作る。客は午前中が多く、解体・鉤吊りした30斤約15kgも有る肉塊を丸ごと売ったり、注文に応じて切り売りして忙しい。しかし午後になると閑になり客と世間話に花を咲かせている。

(2019年1月、四姑娘山自然保護区管理局特別顧問 大川健三撮影)

‘わんりい’ 2019年3月号の目次は20ページにあります

今月は、あまり聞き慣れない言葉です。

・>・>・>・>・>・>・

春秋末期、楚の国の人伍子胥が、楚の平王に父親と兄を殺されたので呉の国に逃れて、呉王闔閭に言いました。「楚の国は黒と白が入り交じり、妖怪と人間の区別もつかず、良いものと悪いものが混ざり合っています。私は万策尽き果てました。大王さま、私めを大王さまのお傍に置いて、呉の国のために力を発揮させてください」。

呉王は、彼を呉の国の大臣に取り立てました。父と兄を殺された仇を討つために、伍子胥は、呉王に楚国を攻撃するように勧め、呉王はそれを入れて、彼と孫武に軍隊を率いて楚の都に攻め入らせました。その時、楚の平王は既に亡くなっていましたが、伍子胥は恨みの気持を晴らすために、平王の墓を暴いて、埋葬されていた遺体を鞭打ちました。

その後、呉の国は伍子胥のような外から来た人たちに活躍の場を与え、西の強国楚を破り、北の方では楚の属国だった徐を滅ぼし、魯や斉にも攻め入って、終には一説に春秋の覇者に数えられるほどの強国になりました。

・>・>・>・>・>・>・

言葉の意味: 良い人と悪い人が一緒に混ざり合っていること。

使い方: 祭りの日には、いろいろな人が集まってくる。良い人も悪い人もいるから、特に注意しなければいけないよ。

・>・>・>・>・>・>・

良いこと悪いことが混ざり合っていて黒白のつけ方ことを言いますが、日本では余り見かけませんね。日本でこの言葉の代わりをするのは、「玉石混淆」で、現在は「玉石混交」と書いています。この四字成語は、東晋の時代に葛洪という人が書いた「抱朴子」という本に出ているそうで、「読んで字の如し」で分かり易いのですが、中国ではこの「魚龍混雑」の方

が良く使われるようです。

それにしても、どうして魚と龍が一緒にいるのかと考えた時、中国では滝を登り切った鯉が竜に成るといふ言い伝えがあるのを思い出しました。この話を初めて聞いた時、私の頭に中には、那智の滝や華厳の滝など 100m 以上も垂直に流れ落ちる滝しかなくて、中国の人々も「そんなことが出来る鯉はいないから、それだけ龍が素晴らしいのだ」と考えているのだと思いました。

しかし、中国には「登龍門」という言葉もあるし、全く不可能とは考えていないようなのを感じて、不思議に思っていました。それが十数年前に、中国で有名な「壺口瀑布」を見る機会があり、その謎は解けました。

この「壺口瀑布」は黄河で最も有名な滝で、300m を超える川幅で滔々と流れていた黄河の両岸から岩がせり出してきて 50m 程に狭まり、巨岩が折り重なるように続くかなりの急こう配を流れ下るのです。一つの落差は大きい処でも 30m 足らずですが幾重にも連なり流れ落ちるのは圧巻です。

ぶつかり合って流れるその水は黄河の由来となった黄土色で、中国の観光会社は「黄金の滝」と宣伝しています。こんな滝を間近で眺めると、こんな滝を魚が登るのは不可能だと感じます。

でもその不可能さは、100m を垂直に流れ下る滝で感じる不可能さとは違ったもので、若しかしたら、中には登りきる鯉も出て来るかも知れない。不可能な中にもほんの少しの可能性を感じさせる不可能さなのです。

中国の人達は、絶望的な状況から事態を変える歴史を繰り返してきました。それで、こんな激しい水の流れに逆らって上流へ登りきる魚が出現する可能性を信じていることができるのでしょうか。

やはり中国の地理と歴史があつてこそその発想なのだと強く感じました。



挿絵：満柏氏

Sān yuè bù zhī ròu wèi
三月不知肉味sān gēf
三月肉の味を知らず〈述而第七〉

桜美林大学名誉教授 植田 渥雄



BC517年、魯の国で内乱が起こり、時の君主昭公が隣国の齊に亡命するという事件がありました。その翌年、孔子も乱を避けて齊に赴きました。孔子36歳の時です。そこで齊国の楽師から、これまで耳にしたことのないような、素晴らしい音楽の演奏を聴かされました。それは太古の聖天子舜が作ったと伝えられる『韶』という名の音楽でした。その時受けた衝撃が『論語』に記されています。

「子在齊，聞《韶》三月，不知肉味。曰：『不圖。為樂之至於斯也！』(Zǐ zài qí, wén 《Shāo》 sān yuè, bù zhī ròu wèi。Yuē: 『bù tú。Wéi yuè zhī zhī yú sī yě!』)」(子、齊に在りて、『韶』を聞くこと三月、肉の味を知らず。曰く「図らざりき。樂を為すことの斯に至らんとは」と)。孔子は齊の国に滞在中、三ヶ月間『韶』の音楽を聴き続けました。その間、あまりに熱中していたため、肉の味さえ感じなかった。そして言いました。音楽というものがここまで素晴らしいものであったとは思ってもよらぬことであった、と。

三ヶ月間肉の味さえ感じなかったとは、ずいぶん熱中したものです。別の所では次のようにも言っています。「子謂《韶》：尽美矣。又尽善也。(Zǐ wèi 《shāo》: 「Jìn měi yī! Yòu jìn shàn yě!」)(子、『韶』を謂う「美を尽くせり。又た善を尽くせり」と)〈八佾第三〉。

『韶』が素晴らしい音楽であったことは、孔子はすでに文献や口伝を通じて知っていたようです。密かに憧れていたのかもしれませんが。しかしその音楽は、孔子の生まれ育った魯の国には伝わっていませんでした。だから実際に聴いたことがなかったのです。その名曲を思いもかけず齊の地で耳にすることができたのです。しかもそれは予想をはるかに超える素晴らしいものでした。残念なが

ら、孔子をここまで熱中させたこの音楽を今の私たちは実際に耳にすることはできません。この一文を通して、その素晴らしさと、孔子の熱中ぶりを想像するだけです。

さて、この一文ですが、句点の打ち方によって微妙に解釈に違いが出てきます。以上の解釈は、『史記』の孔子世家をもとにして、宋代、朱子学の始祖、朱熹が解釈したものです。孔子は齊に滞在中、三ヶ月間この音楽を聴き続けた。その間、肉の味も忘れて熱中した、つまり寝食を忘れて、この曲の習得に没頭した、ということになります。『史記』の文では「三月」の後に「学之」(これを学ぶ)の二字が入っています。このように解釈することによって、聖なるものに対する孔子の志向とその愛着ぶりを強調したかったものと思われる。この解釈は、孔子の日ごろの言動とも合致するので、誰もが納得しそうな解釈です。

一方、これとは異なった解釈もあります。それは句点を「三月」の前に持ってくる読み方です。これだと「子在齊聞《韶》，三月不知肉味」(子、齊に在りて『韶』を聞く、三月肉の味を知らず)となり、齊の地で『韶』の音楽を一度耳にただけで、感動のあまりその余韻に浸りきって、三ヶ月間、肉の味すら感じなかった、ということになります。こちらの方は孔子の音楽に対する天才的な感性と親和性を強調したものとと言えます。

このほかにも様々な解釈がありますがここでは省略します。前者は今日ではほぼ定説になっているようですが、一方、歴史学者の貝塚茂樹先生は後者に近い解釈をなさっています。この解釈にもなかなか捨てがたいものがあるように思えますが、如何でしょうか。

(わんりい「中国語で読む漢詩の会」講師)

お爺さん三人の大連旅行 (1)

寺西 俊英

昨年(2018年)8月、私と同じ住宅街に住む仲良しの三人で大連に行くことになった。出発時のSさん、Tさんと私の平均年齢は、74.3歳である。Sさんは中国大陸に足を踏み入れるのは初めてで、Tさんは二度目であるが二人とも大連は初めてなので、私がガイド役を引き受けた。中国に行く前は、二人とも日中関係が良好とは言えない中で中国は好きではなかったが、帰国してからは中国の庶民、歴史、文化を見直したようである。そしてマナーについても。今回の旅はどのようにして二人の中国への認識が好転するに至ったかも、都度出来事を挿入しながら綴っていきたい。

8月12日の朝、三人は新百合丘のリムジンバス乗り場にいた。飛行機は14時発・CA(中国国際航空)952便なので12時ころまでに成田に着けばよい。ちょうどお盆の帰省ラッシュの時期に当たり、前日の11日は成田空港は入出国者が最高の〇万人とかニュースで流していたので早めに行こうということになり、7時半過ぎに新百合ヶ丘に到着し、8時頃のバスに乗り込んだ。ところが道路はなぜか渋滞はなく9時半には空港に到着した。お昼まで2時間半もあり、兎に角朝食を摂ることにしてレストランでゆったりした。11時ころまでおしゃべりをしたが、そろそろレストランを出てCAのカウンターに行くことにした。Sさんが近くで元に換金したいということで窓口には並んだが、1万円は540元であった。CAのカウンターに行くと11時半から受付開始ということで並ぶことにした。搭乗券を発券してもらおうとなぜか二人の友人は隣同士の席で私は10列入口に近い席であった。結果的にこれが良かったのだ。というのは、飛行機に乗ると三人掛けの座席の二人の隣は中国人であった。その人は日本在住の大連人とのことで、大連空港に着陸するまでとても親切にしてくれたようだ。二人とも中国語は話せないのに、食事の時や入国カードを書くときなど大いに助かったようだ。飛行機はANAではなく中国機であるし、キャビンアテンダントは中国人ばかりで話は通じないし、

機内は大きな声の中国語が飛び交うし、入口に日本の朝刊は置いていないし、何となくイヤな気持ちを2時間45分のフライトの間に解きほぐしてくれたようだ。飛行機から降りた時、隣はいい人だったよ、と喜んでいて。

大連周水子空港には15時45分、ほぼ定刻通りに着陸した。入国審査も無事通過し、外に出ると友人の李さんがニコニコしながら迎えに来てくれている。本来は娘婿が愛車のBMWで来る予定が仕事のために来られなくなったという。迎えの車は日本でいうハイヤーで、駐車場で待たせていた。タクシーより料金は少し高いらしいが、車内は綺麗で運転手は小綺麗な服を着ている。運転もタクシーのように少し車間が空けば割り込んだりせず、安全運転だ。利用料金は後日銀行口座から引き落とされる仕組みだそう。大連に限らず中国のタクシーは、運転は荒っぽい、愛想は無い、おつりの紙幣はくしゃくしゃ、車内は汚れているのが相場である。このようなハイヤーが増えればイメージが随分向上するのに、と思う。

ハイヤーは、ひとまず常宿の大連駅近くにある「大連中山大酒店」に17時頃着いた。最上階の38階が回転する展望レストランの建物だ。フロントでパスポートを出す。部屋は、二人は26階、私は25階とここでも別の階となった。荷物を部屋に置きシャワーを浴びて18時にロビーに集合し、夕食の場所に向かった。夕食は、ホテルから歩いて6~7分のところにある大連一の中華料理店「万宝」である。5月にはアカシアの花が咲き乱れる労働公園の向かいにある。随分いいレストランを予約してくれたものだ。この手の大きなレストランは、1階の広い客席の周囲にいくつもの水槽が置かれ、その中にいる魚やエビ、カニ、大連名物の蝦蛄、貝類などを見て、ついて来ている従業員に注文し、続いて肉類や野菜などのコーナー等を一周しながら注文する仕組みである。大連は海鮮料理が有名なだけに海の幸は豊富である。個室は全て2階にあるので、宮殿のように天井から

はシャンデリアが重そうに垂れ下がり、彫刻された手すりの広い階段を上って行く。4人がドアを開けて中に入ると豪華な円卓が置かれていて壁には絵画が飾ってあり花も活けてある。まず青島ビールが来て乾杯となり、李さんは少し日本語がしゃべられるので和やかな雰囲気では話が弾んだ。青島ビールは度数が低いので下戸の私でもコップに2～3杯は大丈夫だ。そのうち次々に注文した料理が運ばれてきた。

20時近くになり私は明日(13日)の丹東旅行に随行してくれる友人とロビーでの打ち合わせの為にレストランを出た。二人は李さんが旅の疲れが取れるからとマッサージを勧めるので、彼女が知っている腕のいいマッサージの店に向かった。1時間が100元(日本円で約1600円)だったようだ。日本のビジネスホテルでは、大体1時間4千円～5千円というからかなりお得である。二人は2時間その店でゆったりと過ごし、22時半ころホテルに戻ったようだ。その間中、李さんはずっと付き合ってくれ、迷子になってはいけないのでホテルまで送ってくれたようである。二人はやさしい李さんにとっても感謝していた。

8月13日の夜が明けた。今日は、近年北朝鮮との貿易の窓口でテレビによく鉄橋の映像が出るので有名になった丹東に行く日である。飛行機嫌いの金正日が、中国に行くときに列車で渡った鉄橋である。昨夜の打ち合わせで、ホテルからすぐの大連駅から6時23分発のD7741の動車に乗ることにしてある。中国版新幹線は、通常新しく建設した「大連北駅」から出るが、そこまでタクシーで30分かかるので少し早い時間であるが大連駅から出発するこの動車にしたのだ。ちなみに中国版新幹線は大きく2種類あ



大連一のレストラン「万宝」の2階にて

る。ハルピン行きなど長距離の電車は高鉄と言い、時速300キロを超すスピードで走る。丹東など比較的近距离の電車は動車と言い、最高時速195キロしか出さない。5時半にロビー集合なので行くと友人はすでに待っていた。この友人も名前を李さんという。私の中国で参加したツアーなどの経験から中国人は時間にルーズな印象がある。しかし二人の李さんは、いつも時間に正確である。

ホテルから歩いて大連駅に到着し、手荷物を検査する機械に通しエスカレーターに乗って2階の待合室に向かう。大連駅は2階が発階で到着は1階と分かれている。大連駅の現在の駅舎は2代目であるが、1937年(昭和12年)に満鉄の太田宗太郎の設計によるもので、82年経った今でも外観は当時のままである。太田は、東京駅を設計した著名な辰野金吾の教えを受けており、上野駅をモデルにしている。大きな待合室も当時の面影を残している。しばらくするとアナウンスがあり乗客が立ち上がり3列くらいに綺麗に並んで静かに改札を通っている。割り込む人はいなかった。ホームに降りると大きくて長い真っ白い蚕のような16両編成の動車が待機しており、我々は15号車に乗り込んだ。動車は6時23分に音もなく動き出した。日本のように過剰な案内や発車のベルはない。社内アナウンスは次の通り2回だけであっさりしたものだ。日本のように少し遅れるだけで謝ったり、あれこれ言い訳するようなアナウンスはない。

★女士们紳士们列車前方停車站(駅)是○○(みなさま、この列車の次の停車駅は○○です)

★下一站(駅)請提前做好准备(準備)(次の駅で下りられる方は早めに準備願います)

同じ口調なのでおそらく録音を流すだけと思える。検札には来ないし車掌は何をしているのだろう。この動車は時刻表によると到着時刻は9時31分であるが、丹東には9分遅れの9時40分に到着した。勿論遅延したお詫びの言葉は無い。この国全体が細かいことは気にしない適当(?)な体質があるのではなかろうか。(続く)

東西文明の比較(32) 元号について

陽光新聞社・顧問塩澤宏宣

新天皇が即位され、「平成」は4月30日までで、5月1日から新しい元号(年号)に替わります。若い頃、親兄弟を初め、周囲には「明治生まれ」「大正生まれ」が大勢いましたが、今や私の周辺には一人もいません。これからは「昭和生まれ」「平成生まれ」に次いで「〇〇生まれ」の社会になるのでしょうか。「〇〇」がどうなるのか、楽しみです。本稿では、その注目の「元号」について述べてみたいと思います。

※大化の改新

聖徳太子が十七条の憲法で「国に二君なく、民に両主なし」と皇室の権威を成文化してから40年、蘇我入鹿は、自身が皇位を狙うようになりました。朝廷の権威が固まっていなかったとはいえ、臣下が皇位を狙うなどあり得ないことでした。それを阻止すべく立ち上がったのが、中臣(藤原)鎌足と中大兄皇子(のちの天智天皇)でした。

この二人が、皇極天皇の4年(645)、三韓(新羅・百濟・高句麗)からの使者が来朝した朝貢の儀式の場で、蘇我入鹿を惨殺しました。このクーデターが、「大化の改新」の始まりです。この頃は唐の時代。その勢力がきわめて強大でした。そうした東アジア情勢に対応して天皇への権力集中と国政改革に狙いがあったのでしょう。

そのために、唐の律令制を手本として、中央集権国家の建設を目指したのが「大化の改新」でした。この皇極4年を「大化元年」として、日本初の元号がスタートしたのです。

※「元号」を持つのは、今や日本だけ

元号とは、その国独自の年の表し方を言い、

世界で現在も元号を使用しているのは日本だけです。主に、新天皇が即位した際に新たな元号に変更されてきましたが、大地震や津波、大火、干ばつ等の自然災害を初め、疫病や戦乱、新将軍就任などの際にも、改元されてきました。改元によって新たな時代を築きたいとの願いが込められたものでした。

大火や自然災害の多かった江戸時代には、37の元号が使用されていました。しかし、明治政府が成立してからは、一人の天皇にひとつの元号という「一世一元」の原則が打ち立てられました。

「平成」は、1989年に誕生しましたが、「大化」から255番目の元号です。「平成」の31年は、「昭和」の64年、「明治」の45年、更には室町時代の「応永」の35年に次いで歴史上4番目に長い期間使用された元号になります。なお、逆に一番短い元号は686年の朱鳥(しゅちょう)の約2ヶ月でした。

元号は主に中国の昔の書物の一節から採られることが多く、「平成」は、中国の「史記」の「内平外成」、同じく「書経」の「地平天成」が出典で、「内外、天地ともに平和が達成される」という意味になっています。ちなみに、「昭和」は「心を合わせて仲良くしよう」という意味でした。

※中国の元号

前漢の武帝の治世・紀元前115年頃に、統治の初年に遡って「建元」という元号が創始されて以降、清まで用いられました。武帝以前は王や皇帝の即位の年数によって、単に元年・2年とだけ数えられ、新しい王が即位すると改元されて再び元年から数えられる在位紀年法が用いられていました。治世途中での改元は文帝によるものが最初で、改元後は後元年・後2年とされました。武帝の時、「元」は祥瑞によって決めるべきで、即位の年を「建」、彗星出現の年を「光」、一角獣(麒麟)捕獲の年を「狩」とすることが献策

されました。これによって「建元」「元光」「元狩」といった元号が作られ、以後、このような漢字名を冠した元号を用いる紀年法が行われるようになりました。

この中国の元号は、中国王朝の冊封を受けた朝鮮、南詔、渤海、琉球などでもそのまま使われました。(南詔、渤海は独自の元号も使用した) 明の太祖(朱元璋)は、皇帝即位のたびに改元する一世一元の制を定めました。これによって実質的に在位紀年法に戻ったといえますが、紀年数に元号(漢字名)が付されることが異なってきます。また元号は皇帝の死後の通称となりました。しかし、この歴史ある元号の伝統は、1911年に辛亥革命によって清朝が倒れると同時に廃止されました。

※天皇という「称号」

7世紀後半の第40代天武天皇の時代に、「天皇」の称号が一般的に使われようになり、孫の文武天皇の時代の702年に公布された大宝律令で、「天皇」の称号の使用が法的に定められます。日本が中国と対等であることを国際的に宣布することは戦略的にも重要でした。

当時、日本は朝鮮半島南部を服属させていました。現在の韓国の約半分は日本の一部でした。「広開土王碑」によると、日本は391年、百済を服属させ、新羅と百済は王子を日本に人質に差し出していました。「日本書紀」の雄略紀や欽明紀では、日本が任那をはじめ伽耶を統治していたことが記されています。伽耶は朝鮮南部の広域地域を指す呼び名です。「日本書紀」は、日本が朝鮮半島を支配した証拠や根拠となる史実を論証することを編纂の目的の1つとしていました。中国の史書「宋書」の中の「夷蛮伝」では、倭の五王の朝鮮半島への進出について、記述されています。このように、領土拡張を続けていた日本は中国に対し、へり下る必要はなく、朝鮮

半島をはじめとする東アジア諸地域に対し、日本の優位性を示すためにも、日本の君主は中国への臣従を意味する「王」の称号を捨て、自ら「天皇」を名乗ったのです。

中国皇帝も日本の国力を考えれば、日本の意向を無視できないはずだと、聖徳太子をはじめとする日本の首脳部は見抜いていました。当時の日本が国際情勢を見据えた戦略の中で、「天皇」の称号を打ち出したことは時宜に応じたものであり、優れた大局観であったと言えます。今日まで続く「天皇」の称号には、古代日本人のあふれる気概が息づいています。

※「スメラミコト」に匹敵する漢語表現

中国の神話では、「天皇(てんこう)」・「地皇(ちこう)」・「人皇(じんこう)」の3人の伝説の皇が世界を創造したとされます。その中でも「天皇」は最高神です。道教でも、「天皇(てんこう)」が崇められています。

日本には「オオキミ(大王)」という俗権的称号のほか、「スメラミコト」という聖権的称号がありました。最高祭司としての「スメラミコト」に匹敵する漢語表現(当時の国際言語)を探し求め、宗教的かつ神話的な意味を持つ「天皇」がふさわしいと選定され、この称号によって、「オオキミ」が天の神の子孫であることを知らしめようとしたと考えられます。そして、同時に、その子孫の血統を守ることも強く意識されて、天皇の地位は天皇家の家系にのみ、独占的に世襲されることの正統性も導き出しました。「天皇」は中国皇帝に唯一、対抗できる称号だったわけです。「天皇」は英語で「エンペラー(emperor)」、つまり「皇帝」ですが、その称号の誕生の歴史的背景を考えれば、本来、「エンペラー」とは異なるものであり、やはり天皇は「天皇(TENNO)」が最適だと思います。

「女王谷の食べ物」というタイトルで原稿を書くことになり考え込みました。旨い不味いは個々人の好みで変わるものの、チベット文化圏でほとんどの日本人が心底美味しいと思う食べ物は無いと私は思っているからです。勿論お腹が空いている時に旨いと思って食べられる物は沢山あります。私は世界各地を旅した時に何でも食べましたが、日本の魚料理程に美味しいと思った食べ物は稀で^(注1)、これは子供の頃から習慣になっている味覚のせいだと思っています。それはチベット文化圏の人達も同じようで、慣れ親しんだ味に強く拘る人が多いです^(注2)。

こんな事情からここでご紹介する女王谷の食べ物は、地元の人達(多数派のギャロン・チベット族と漢族、それに他のアムド等の少数派のチベット族と回族と羌族)が日常慣れ親しんで心底美味しいと感じる食べ物で、且つ私の身近に有って日本人が抵抗なく食べられる伝統的で庶民的な物です。

1. 莫莫(momo、四川弁でモモ):日本では「ナン」の名前で知られているパンで、チベット族と回族と羌族の近代以降の主食になります(それ以前は炒った裸麦の粉やトウモロコシのパンが主食でした)。チベット語の方言は幾つもあり「ケー」もその一つです。

小麦粉と水(近年ではパン酵母を入れる場合もあります)を練って数時間寝かしてから焼きます。昔は炉辺や竈^{かまど}の内壁や灰の中で焼きましたが、今は大きな油を敷いたフライパンで焼き蒸す場合が増え、町の店で買うと8元(1元≒17円以下同じ)位です。酸菜(発酵させた高菜)や細切りにして炒めた豚肉やバターを包み入れて焼く場合もあります。

(写真1)はギャロン・チベット族の農家の食卓に置かれた大きなナンで、後方にバター茶が注がれた碗



写真1 大きなナン

や肉の炒め物や泡菜等の四川風の料理が並んでいます。ホカホカの大きなナンを家族で囲み小さく千切り合いながら食事する風景には、家族の一体感と平和な豊かさと生きている有り難さを感じます。

2. 酸菜麵塊(suancai-miankuai、四川弁でサンツァイメンクァロ):日本風に言うと「酸菜煮込みうどん」です。チベット語の方言は幾つもあり「ブドウ」もその一つです。

小麦粉と水を練って数時間寝かした生地(パン酵母を使わない)を薄く伸ばして折り畳んでから日本の「うどん」のように太く切って麺を作り置き、発酵させた高菜・香辛料(刻んだ大蒜/生姜/唐辛子/山椒/胡麻等)・じゃが芋千切り・白菜・豚の皮の唐揚げ等を強火で炒めてお湯を加えてから、麺を入れて一緒に5分位煮込みます。農家では食事の趣に変化を持たせるかのように時々食卓に出て来ます。

(写真4)は丹巴の町の食堂^(注3)で撮影した物で12元です。豚の皮の唐揚げをサクサクと食べ易く作るにはコツが有り、食堂では作り方を見せてくれませ



写真2:「うどん」のように太く切る



写真3:麺を入れて具材と掻き混ぜながら煮込む



写真4:「煮込みうどん」の出来上がり。豚の皮の唐揚げは刻み葱の手前に浮かんでいる



写真 5 : 麺の部分拡大図

んでした。

3. 酸菜包子(suancai-baozi、四川弁でサンツァイバオツー):チベット語の方言は幾つも有り「ポロ」もその一つです。

小麦粉と水とパン酵母等を練って一晩寝かした生地を小さく引き千切り、手で拵げて酸菜(発酵させ唐辛子を効かせた高菜)と豚脂身の細切りを包み入れ水餃子に似た形に整えてから 10 分蒸します。出来上がりは膨らんで水餃子とは趣が違います。唐辛子が入ったタレと一緒に供されますが、使う使わないは好みです。

下の写真は丹巴の町の食堂^(注3)で撮影した物で 16 元です。農家で作る酸菜包子は 2~3 倍大きく具も色々で家庭の味が有り、タレを使いません(唐辛子を塗して食べる人も居ます)。(続く)

■注

1) 「世界食べ歩き」等のタイトルで「世界の美味しい物」を紹介する記事や番組は多いですが、「見た目が綺麗・奇異で珍しい・高級そう」なので気を引かれて食べたくなる物は沢山有っても、実際に食べて心底美味しいとは限りません。私が日本の魚料理程に美味しいと思った外国の食べ物は 40 年近く前から指折り数えて、フ

ランス・モンサンミシェルに近い海岸縁の民宿で供された蒸した貝を盛った料理、オランダ・マルケン島の港の屋台で食べた酢付け鰯のサンドイッチ、パキスタン・フンザの元貴族の館で供されたカレー料理、そして近年では中国・麗江の虹鱒の刺身位です。こうして見ると子供の頃から習慣になっている味覚(カレーも子供の頃からの嗜好)の域から出てないようで、笑われそうです。

2) 一方で、この数 10 年の間に丹巴や四姑娘山のような奥地にまで及んだ通信交通インフラの飛躍的な発達と国際経済社会のグローバル化によって味覚も収斂しつつあるように見え、その単純化を残念に思う事があります。

3) この食堂は丹巴の旧バスターミナル東側に在る「嘉絨小喫」です。これは丹巴に在る唯一のギャロンチベット族の家庭的な料理を供する食堂で、部族によって異なる煮物や炒め物の材料や作り方の細かな注文にも応じてくれます。その分待ち時間は長くなりますが、お



家庭的食堂「嘉絨小喫」の正面

客さんは雑談しながら気長に待っています。そのため開店してから 6 年間客足が途絶えず、店の広さも開店当時に比べ 2 倍になっています。

●大川さんのホームページはこちら

<http://rgyalmorong.info/index.htm>
<http://rgyalmorong.info/scholaweb/conts.htm>

▲お知らせ:女王谷の HP (<http://rgyalmorong.info/>)に、当地の風情を紹介するサンプルビデオ(MP4 形式 8MB 前後)1 分余り×15 本を追加しました。日本語 HP に入って頂いて、先頭頁の左下に有る、「風情のあるビデオ」でご覧になれます。
<http://rgyalmorong.info/scholaweb/queenvideo-j.htm>



写真 6 : 小さく引き千切った生地を手で拵げて酸菜(発酵させ唐辛子を効かせた高菜)と豚脂身の細切りを包み入れる



写真 7 : 水餃子に似た形に整えて蒸す



写真 8 : 酸菜包子の出来上がり

李華の「春行興を寄す」

報告：花岡風子

今月のお題は、盛唐時代に作られた「春行興を寄す」という詩でした。作者の李華は杜甫とほぼ同年代の盛唐の詩人です。杜甫ほどには有名ではないものの、『唐詩選』をはじめ各種の詩選集に出て来るほどの詩人であり、散文の名手としても知られています。この作品も中国で人気があるそうです。但し、後世に伝えられた作品は、この一作だけです。

春行寄興

李華

yí	yáng	chéng	xià	cǎo	qī	qī
宜	陽	城	下	草	萋	萋
jiàn	shuǐ	dōng	liú	fù	xiàng	xī
澗	水	東	流	復	向	西
fāng	shù	wú	rén	huā	zì	luò
芳	樹	無	人	花	自	落
chūn	shān	yī	lù	niǎo	kōng	tí
春	山	一	路	鳥	空	啼

春行興を寄す

宜陽の城下、草萋萋たり

澗水東に流れて、復た西に向かう。

芳樹人無く花自ずから落ち

春山一路鳥空く啼く。

「春行興を寄す」と題されているように、春の風景に興味を寄せて詠んだものでありながら、内容は杜甫の「国破れて山河あり」を連想させる、どこかもの淋しいものになっています。宜陽とは『三国志』にも出て来る有名な街の名で、現在の河南省洛陽市宜陽県にあたります。

ここには、唐の時代、皇帝の行在所がありました。皇帝の観光名所として賑やかな街であったようです。その街は、作者が訪れた時には草が茫々と生い茂って荒れた姿になっています。作者が旅の者であることは書かれていないのですが、「草萋萋たり」という言葉が屈原の『楚辞』の典故であることから、作者の旅姿が連想されます。

『楚辞』招隠士の「王孫遊兮不帰、春草兮萋萋」（王孫遊びて帰らず、春草萋萋たり）という一句は、国

から追放された楚の王族の屈原が旅に出たまま故郷に帰らない、春の野にはただ草が茫々と生えているだけ、という意味です。この詩の主人公の王孫が具体的には誰を指すのか必ずしもはっきりしませんが、おそらく屈原をイメージして作られたものと思われます。よって、後世「萋萋」の二字がくると、必ず屈原の孤独な姿が思い浮かび、旅や別れを連想し、孤独な旅に自分が出ているか、そういう旅人を家で待つ、というニュアンスが生まれたようです。このように漢詩は韻律を整えるだけでなく、典故をちりばめるといふ技巧も凝らされています。「相声」という中国の漫才も、古典を知らなければ笑うことが出来ませんし、現代のトレンドドラマの会話の中でも、古典からの引用句の多さに、改めて驚きます。中国語の学習者もある程度以上のレベルになれば、古典を学ぶことが避けて通れない理由です。

さて、澗水とは谷川のことですが、東に流れて、また西に向かう、とは川が湾曲している様子を表現しています。中国人は湾曲した川を好むようです。河川の曲がりくねった地点は観光地になったりしていますし、中国の風景写真展でもこのような地形を被写体にした作品をよく見かけます。時代は少し遡りますが、王羲之の『蘭亭序』に出てくる曲水の宴はそのような趣向が伝統行事化した一例です。

芳樹とは、花の咲いた木なので、春に花咲く桃や李でしょうか。「人無く、花自ずから落ち」とは、花を愛でる人がかつては大勢いて賑わっていた時代があったことを思い浮かべているようです。「春山一路、鳥空しく啼く」とは美しい春の風景は変わらないのに、かつて栄えたところが、今は人がなくなり、鳥の声だけが辺りに空しく響いているという意味です。一見、春の美しい風景を詠んだような詩に思えますが、この詩を詠んだときの作者の状況を植田先生が解説して下さいました。

時はちょうど安祿山の乱の後。李華は乱が起きた時、叛乱軍の占領地帯にいた母を救い出そうとして

賊軍に捕らえられてしまいます。乱が治まった後に、李華は賊軍に協力したという罪を着せられ左遷させられてしまいます。その後、官を辞して都を離れ、あちこちを転々と旅していたのです。

こういう背景を知ると、運命に翻弄され、左遷の憂目に遭った元役人が、旅の途中にかつては活気に満ちていた街に立ち寄り、それが、廢墟のように静まり返っている様子を目にしたときの暗澹とした気持ち、なんだかリアルに迫ってきますね。三句目の「芳樹人なく、花自ずから落ち」からは、作者の目が、華やかに咲き誇る花よりも、寧ろその盛りを誰にも愛でられることなく散っていく花の方に向いていることが伝わります。それはあたかも才能ある人が世の中に認められることがなくうずもれていく状況と重なります。

幼いころから才能を認められ、科挙に合格して役人になるというエリート街道を歩いてきた李華にとっては、目の前で人知れず落ちていく花に自分の身を重ねたのではないのでしょうか。後に、左補闕・司封員外郎として召されたが、辞退しています。一時は江南觀察使の幕下に入ったが、病気のため辞職して、晩年は田舎に隠棲、農耕に従事して世を終えたそうです。

このような背景を知ってから朗読すると、最後の三文字「鳥空啼」に込めた心の虚しさ、無念さも、一層深く感じられ、「鳥空啼」の三つの音の響きにも、おのずと格別の感慨が出てきました。

詩の構成は、一、二、四句の最後を平声で押韻し、三句目の末尾は仄声で韻を外しており、

後半二句は対句になっています。現代語で音読しても読みやすく非常に美しい詩です。「掛け軸に掛かっている一幅の絵を想像しながら、詠んだら良いですね。」と植田先生。一同声を合わせて、朗読練習をしました。

麗らかな春に香り良い花が咲く木々に囲まれた風景だけを鑑賞すると、むしろガヤガヤ姦しい花見客などいないほうが良い眺めとも思えるのですが、作者の心境を忖度しながらこの風景を想像すると、このアラフォー女子も、誰にも見られることなく散りゆく花に自分を重ねずにはいられません。

【中国の笑い話】40 「365 夜笑話」より

第 135 話 補習

先生「今日から、この時間は補習授業をします。もうポーカーをしてはいけません」

生徒「分かりました」

先生「10+3は何ですか？」

生徒「キングです！」

第 136 話 短方形

父親が長方形の図形を指して、息子に訊いた。

父親「これは何と言う形かね？」

息子「長方形でしょ！」

父親が正方形の図形を指して訊いた。

父親「では、これは何と言う形かな？」

息子は一所懸命考えて答えた。

息子「えーっと、短方形！」

第 137 話 同じ理屈

父親「小明、問題を出すから、よく考えて！ 木の上に2羽の小鳥が止まっていた。一羽は鉄砲で打たれて死にました。木の上には小鳥は何羽いますか？」

小明「一羽」

父親「馬鹿だなァ、鉄砲の音に驚いて、別の一羽も逃げてしまったんだよ。今度の問題を間違えたら、お尻ぺんぺんだぞ！ いいかい！ 部屋に小明が一人にいるところに私が入って行きました。今、部屋には何人の人がいるでしょう？」

小明「一人」

父親「どうして一人なんだい？」

小明「ぼくは逃げてしまったから」

(翻訳：有為楠君代)

【‘わんりい’の原稿を募集しています】

‘わんりい’は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行などで体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話、これはと思う楽しいイベント情報などを気軽にお寄せ下さい。

尚、‘わんりい’は、新入会をいつでも歓迎しています。年度途中に入会の方には会費の割引があります。

お気楽に問い合わせください。

年会費：1500円 入会金なし

‘わんりい’振替口座(郵便局)00180-5-134011

日中文化交流市民サークル‘わんりい’

海外出張の思い出（帰国に向けて⑫）

高島敬明

日本への帰国は何の問題もなく、モスクワで2泊し、クレムリン宮殿、レーニン廟、グム百貨店などを見学し、買い物をしました。お土産は、有名なマトリョーシカ、熊の毛皮の帽子（モスクワでは真冬無帽で出歩くと警察に逮捕されると言われています）、それから随分苦勞を掛けた家内への感謝を込めて、〈真っ白の銀狐のマフラー、琥珀のネックレス、ブレスレット等〉をお金のことは考えずに買いまくりました。

エアフロート機は、1977年に出発の時の羽田空港ではなく、完成した成田空港（1978年5月20日開港）に無事に到着しました。

1年ぶりに本社ビルを見た時、流石に感慨深いものがありました。挨拶回りを済ませると、また通常の建設関係の営業と現場指導の仕事に復帰しました。まず、寺島さんから頼まれたお兄さんへの手紙を書きました。焼き増しした写真、それに、寺島さんはご家族共々非常にお元気であること、生活は裕福であること、望郷の念が強いこと、ご親族の近況が知りたいこと等を書いて、札幌の74歳の寺島親蔵氏にお送りしました。折り返し丁寧なお礼の手紙が綺麗な字で届きました。約束を果たして本当にホッとしました。

そんなある日の夕方、疲れて会社に帰ると上司から、「高島、奥の応接に公安の人が待っているよ。すぐに行ってくれ」と言われました。

私は『公安』という言葉がピンと来なかったので、「何ですか？」と聞き返しました。「お前、公安を知らないのか！『警察』だよ。」と言われたので急に不安になり、何か悪いことをしたかな？交通違反かな？と考えましたが、思い当たるフシはありません。身なりを整え応接室に入って行きました。予想に反し、ニコニコした32、3歳の若い背広の人が愛想よく、「このたびはご苦勞様でした。本当に大変だったでしょう。」と言われ、当時のタ



1979年完成。カスピ海のバクーから配管で運ばれた原油を黒海のノボロシースクで外洋に運ぶため、直径28インチの当時最大のローディングアーム(流体荷役装置)を設置しました。（GoogleEarthより、2018年撮影）

バコ〈ハイライト〉が10箱入ったカートンを頂きました。ロシアの話を知りたいということでした。私は言われるままに今回の工事の概要を話し、宿舎の生活などの話をしました。交通の事、お金の事、病院の事、学校の事、日本の船の入港の事他細かいことまで聞かれました。答えられる範囲でお答えし、2時間くらい経ったころやっと終わりました。最後に何か変わった話はありませんでしたか？との質問です。「はあ……。そうそう寺島儀蔵さんという人が私の通訳でした。昭和10年に樺太からソ連に亡命したと話していました。18年間シベリアに送られたそうです。」と答えますと若い公安の人の目の色が少し変わったように思いました。真剣に話をメモしていました。その日はそれで終わり、やれやれそんなことかと安心して家路につきました。

1週間たった頃でしょうか、再度「公安」の訪問を受けました。彼は一方的に話を始めました。「高島さん、あの辺りは我々西側の人間は絶対に入れないところで、情報は一切入って来ません。それは宗教的な問題で、回教徒の国が近く、回教徒の国民も多く何かと問題になっているところです。子どもたちの移動には青色回転灯を付けた警

察車が前後護衛することもある、国境警備の厳しさもすべてそのためです。そんな意味であなたは貴重な経験をされました。寺島儀蔵さんは確かにいました。昭和10年に行方不明になっています。いまでも日本国籍があります。」などとガンガン話されて面接は終わりました。何年か後に書店で購入した寺島さんの著書では、「私は日本国籍がありません」と書いてありましたが、この時の私の言動で国籍を抹消されたのではないかと心配になりました。

それから数年が経ちました。日本経済新聞の2面の1/4の紙面に『忘れられた人々』、と題した連載が掲載されるようになりました。ある日紙面の連載の所を何気なく見ていましたら、何と作者を見ると「寺島儀蔵」とあり、本当にびっくりしました。詳細に書かれた記録文章は驚くような内容で、毎日毎日目を皿のようにして読みました。本当にこのような経験をされたのかと驚愕の日々でした。寺島さんが帰国を許されて日本に来られたのは、1993年で83歳の時でした。

まだ『忘れられた人々』の連載が終わっていない頃だったように記憶しています。私は長期の建設現場への出張から帰ってきて、これからの新規営業の為の情報を得ようとたまに日経新聞を読んでいました。隅っここの小さな記事に、〈寺島儀蔵氏帰国する〉と見出しがありました。新聞の日付を見ると1か月くらい前の新聞だったと思いますが、目が釘付けになり夜だったにも拘わらず日本経済新聞社に電話を入れて聞きましたが、要領を得ず再度翌朝電話で尋ねました。返答は日本での仕事と休養を終えてやはりひと月前に帰国したとのことでした。タッチの差でして非常に残念無念でした。日経の記者の皆様、日本経済新聞社の方々、各方面の方々のご尽力と保証があってこそ、シベリア送りの体験の方が帰国できたものと思います。また「本の執筆の仕事」のため旅行の許可が取れたのかと推測しています。寺島さんは絶対に私の事を覚えていてくれたはずなのに、と悔しかったのを覚えています。一方こんな私のような人間のことなど忘れていさ、とも思ったりしまし

た。日経新聞の連載中になぜ同社に電話を入れなかったのかと悔やんだりもしました。

それから数年後だったと思います。おそらく新聞に連載された記事をまとめて出版されたのでしよう。日本経済新聞出版から『長い旅の記録』として2冊立派な本が出版されました。私は全く知らなかったのですが、会社の大先輩から「高島、お前の名前が出ている本があるぞ！」と言われ、この本のことを知りました。早速古本市で買い求めましたが、牢獄暮らしなどの体験をよく覚えていたものだと思うぐらい詳しく書いた本でした。2冊目には監獄から釈放されてからの事、日本企業との通訳の仕事などが書かれています。ノボロシースクの仕事についても書かれています。エンジニアリング会社の偉い人の名前は出てきませんが、私の名前は忘れないで出てきます。「寺島さんが注意したのにゴムボートが盗難に遭った」話の他、2か所ほど出てきます。私のことは忘れていなかったのです。お逢いしてその後の人生のお話など聞きたかったのですが、もうそれもかなわなくなっていました。その後、寺島さんが帰国時に釧路の親戚宅に逗留し、執筆活動をしたと聞きしました。また出版の仕事などで数回帰国されたことも聞きました。よかったなあ。人生悪いことも良いことも帳消しになったのかな、などと自分に言い聞かせ納得していました。立派な数奇な運命の人と知り合いになれたことは、人生の最大の思い出として胸にしまっておこうとしましたが、やはりこのシリーズに掲載するべきと考え長々と書いてしまいました。お許してください。

寺島儀蔵氏は、2001年、晩年暮らした黒海沿岸の街・トアプセで亡くなりました。本当に波乱の一生でしたが、晩年は心穏やかな日々が続いたのは良かったと思います。最愛の人・ナージャと一緒にいられたことは彼にとって幸せな事でした。なおナージャの消息は分かりません。連れ子の男の子は、現在は何をされているのかは定かではありませんが、当時寺島さんから教師をされているとお聞きしたことを付言しておきます。

(ソ連編完)

中央アジアのキルギスとウズベキスタンを訪ねて(2)

為我井輝忠

10月18日タムガ村からビシュケクへ戻って、さらにここにあと数日滞在して、次の目的地であるウズベキスタンのタシケントとサマルカンドへ行く予定であった。

ビシュケクには「オペラバレエ劇場」という劇場があり、ここも日本人抑留者が建設に携わったと言われているが、真偽のほどは分からない。と言うのは、抑留者たちが建設に携わったと言われていながら、正式な記録がないために不明な状態であった。70年近い年月が様々な記録を消し去っているようである。

次のタシケントへ移動する前に、かつて国土館大学に留学していた Adilet Koolanbekov (アディレット・クーランベコフ) 君に会った。もう5年前になるが、鶴川にある21世紀学部で留学していて、何度か他の留学生と共に会う機会があったので、今回連絡を取ると、時間を取ってくれて会うことが出来た。ビシュケク市内を案内してくれただけでなく、夕食を共にすることが出来た。

アディレット君は、現在ビシュケクの JICA 事務所 で農業を専門に働いているそうである。日本にいた時もそうであるが、日本語が大変上手なのには感心するばかりである。日本で会ったキルギス人は皆、日本語のみならず他の言語も上手で、国民性として語学の才に恵まれているのかもしれない。今回の旅行のガイドをお願いしたエレメック氏も日本人と全く変わらず、話している声だけを聞いていると、日本人と間違えてしまうほどである。現地で会った日本人たちも彼のことを日本人だと勘違いしたほど



サマルカンドのシンボルとも言うべきレジスタン広場



ナボイ・オペラ・バレエ劇場

である。また、日本語はもとより母国語であるキルギス語そしてロシア語、英語も堪能である。日本には2回短期で研修に来たことがあり、今後2020年の東京オリンピックには柔道選手の通訳として来日するそうである。東京での再会が楽しみだ。

ビシュケクで感じたことのひとつを最後に加えたい。それは中国の存在の大きさである。キルギスは中国と国境を接しているため、両者の関係は当然密なものであるが、何かその関係は不気味なものを感じる。例えば、中国文化の進出が著しい。街を歩いているだけでも、中国文化センター、中国語学院の類があちこちで目につく。一方、日本関係の施設と言えば、日本文化センターは1か所だけで、日本語を教えるのは大学が数か所に過ぎない。ここではよく中国人と間違えられる。それほど中国人は多いということなのだろう。

キルギスには計10日間いたことになる。次に、隣国ウズベキスタンのタシケントへ飛行機で移動した。所要時間は1時間強で、あっという間であった。迎えの車でホテルへ移動した。ここは1泊のみで、帰路再度3泊する予定であった。翌朝、サマルカンドへ列車で移動した。超特急「アフラジャア号」という列車に乗ったが、日本の新幹線並みの設備で、ただスピードはそれほどではない。2時間半位でサマルカンドに到着した。この列車の予約は早めに旅行者に頼んであったが、最低1か月前に予約をする必要があるようで、外国人旅行者のみならず地元の人々にも人気がある列車である。

サマルカンドはもうずいぶん前から来てみたいと思っていた。ここはかつてのシルクロードの要衝の地で、「青の都」と称えられている。長いこと、「サマルカンド」という言葉の響きに魅了されてきた。歴史書によれば、紀元前4世紀、アレクサンドロス大王の遠征軍がこの都にやって来た時、「話に聞いていた通りに美しい。いやそれ以上に美しい」と言わしめたほど、繁栄を極めていた。しかし、1220年のモンゴル軍の攻撃で、街の大半が破壊され、壊滅的な被害を受け、無人の巷と化した。そのサマルカンドを蘇えらせたのがティムールである。「チンギス・ハーンは破壊し、ティムールは建設した」と言われるように、彼は帝国各地から連れ帰った職人や建築家たちを使い、サマルカンドをイスラム世界の名だたる都市に復興させた。彼が手掛けた壮大な建築群は、それから600年を経た現在も圧倒的な迫力で旅人を魅了している。

サマルカンドでまず訪れたのはレジスタン広場である。ここはサマルカンドのシンボルとも言うべき広場で、3つのメドレセ（神学校）が広場を取り囲み、イスラム調の建物が生み出す見事な調和を見ることが出来る。ウルグベグ・メドレセ、シェルドル・メドレセ、ティラカリ・メドレセの3つの神学校は今では観光施設となっているが、かつての栄華を偲ぶことが出来る。

サマルカンドには5泊した。この間、様々なモスク、ロシア正教会、シナゴーク（ユダヤ教会）、博物館等を訪ねたが、ツアーではなかったので、気ままに、自由に滞在することが出来た。

その後もう一度タシケントに戻り、最後にこの地にある日本との関わりのある場所を訪ねた。今回訪ねてみたいと思っていた場所は「ナボイ・オペラ・バレエ劇場」である。1947年に完成した劇場はソ連のシベリアから連れてこられた日本人抑留者が、2年にわたり強制労働で建設に携わった場所である。1966年4月に発生した大地震の際に、この地の多くの建物が崩壊したにもかかわらず、この建物は無事で何ともなかつたそうだ。「日本人が建てた建物は、地震の時にもびくともしなかつた」という地元の老人の話を聞いた。

ここでは幸いにもオペラの公演を見ることが出来た。たまたま訪れた際にその晩に何かあるようだったので、窓口で尋ねると、オペラがあると言うので、チケットを購入した。オペラの公演も素晴らしかつ



日本人抑留者墓地

たが、建物の内部をじかに見、日本人抑留者の労苦の跡を確かめることが出来た。1500人程収容でき、内装が素晴らしかった。

もう一つ日本人抑留者に関するもので次に訪ねたのは「日本人墓地」であった。この地で亡くなった79名の日本人が葬られた墓地はモスLEM人の共同墓地の片隅にあり、なかなか分からなかった。しかし、ここまで頼んだタクシーのドライバーが何度も地元の人に尋ねながら、ようやく連れて行ってくれた。公園風に作られた墓地には桜の木が何本も植えられ、ウズベキスタン各地で亡くなられた方々の墓石が皆日本の方に向けて作られていた。その表面には日本語で名前と出身県が刻まれていた。中央には記念碑もあり、たくさんの千羽鶴がたむけられてあった。ここで墓守とお会いした。この方は父親の代から無償でこの墓の管理をされているそうだ。墓地は落ち葉が見当たらないほどきれいに清掃されていて、その働きには感心させられた。安倍首相がここを訪問した時にお会いし、その労苦を労ってくれたと話していた。

帰路、墓地の近くに「抑留者資料館」があり、ここも見学した。映画監督のスルタノフ・ジャリル氏が集めた当時の抑留されていた日本人に関する資料を数多く集めて、公開したものである。ジャリル氏が直接説明してくれたが、ロシア語とウズベク語だけだったので、よく理解出来なかつた。ただ、日本語の資料や写真などもあり、当時の様子が分かつた。

今回の旅行ではあまり観光地を回るようなことはしなかつたが、その代わりキルギスとウズベキスタン両国で日本人抑留者の足跡を辿ることが出来た。このまま気づかれることなく、歴史のかなたに埋もれてしまうかもしれない事実を教えてくれることがたくさんあった。

★6.6日目（9月27日）

9月27日(木)、曇りのち雨。この日で観光は終わりではありますが、旅行中は雨ばかりとなりました。田井さん曰く、「陝西省は晴天がばかり」とのことだったが、これだけ雨が多いとなると、我々の中に必ず雨男がいるに違いありません。

前日から宿泊しているホテルは、西安でも有数の4つ星ホテルです。朝食バイキングは種類が豊富であり、これまでの3日間で宿泊したホテルにはなかった飲み物のバイキングもありました。ただ、この4つ星ホテルにも欠点があり、浪花さんの部屋ではシャワーの排水が溜まり、シャワールームが浸水し、また柳田さんの部屋ではテレビの電源が消えないトラブルがあったようです。

朝食後、早速、西安市内観光に繰り出しました。この日のガイドは黄氏他に、西安の旅行社の孫萍^{ソンピン}さんという女性ガイドも加わりました。彼女が加わったことにより、男性陣のテンションが上がったような感じがしました。

バスの中では孫さんの西安に関する説明を受け、最初の目的地である華清池に到着しました。華清池は温泉地であり、唐の玄宗皇帝と楊貴妃がデートを重ねた場所でもあります。

園内には、楊貴妃が入浴したであろう浴槽や皇



楊貴妃像前で記念撮影



兵馬俑の一団

帝専用の浴槽（100人くらい入浴できる）がありました。湯は張ってありませんでしたが、当時の様子をなんとなく想像できる感じがしました。

華清池を見学した後、西安観光のメインである兵馬俑博物館に移動しました。兵馬俑は秦の始皇帝のお墓近くに埋められた兵士や馬の形をした埴輪^{シブリン}であります。

館内は非常に混雑しており、じっくりと鑑賞することは難しかったです。まだ未発掘のものや修復中の兵馬俑も多く、一部では写真撮影の規制がかけられていました。

昼食を博物館内でした後、食堂の1階の売店で、兵馬俑のレプリカを物色していたところ、店員より600円の「将軍・兵士・馬の3点セット」を、半額の300元にするから買ってと言われ、榎野氏と私は3点セットを購入しました。

だが、翌日、西安空港の売店で、この3点セットよりも重さが軽いものが80円で売っていることを知ることになります（少しショックを受けましたが、自分では材質が館内で購入した方がいいと言いついて、納得している状況です）。

兵馬俑博物館の後は、雨の中、始皇帝陵を見学しましたが、未発掘であるため、小山と公園があ

るのみで、ただ足元を濡らしただけでありました。

その後は、西安市内に戻り、黄さんに無理を言って、新華書店やスーパーに寄っていただき、料理本や西安名物の水晶餅を購入しました。

最後の晩餐は、非物質文化遺産であり、西安でも有名な徳發長にて餃子宴となりました。彩りとりどりの、珍しい餃子を食しました。毎回、食べきれないほど出てくる食事により、この旅行の期間中に、我々の体重は確実に上昇しているはずで、帰国後は、ダイエットをしなければならないと、思いました（実際に2～3kg増のため、減量しました）。

食後は、歌舞大劇院にて伝統的な歌劇を鑑賞しました（西安古来の楽器を使ったミュージカルのようなもの）。名前は忘れましたが、8番目の演目はお勧めです。

鑑賞後は、ホテルに戻り、この日1日お世話になったガイドの孫さんとお別れとなりました。非常に流暢な日本語でガイドをしていただき、そして和ませてくれて、本当にありがとうございました。また大阪組の浪花氏と榎野氏とは、明日の出発時間が異なるため、この場でお別れの挨拶及び次回の再会を約束しました(?)。

★7. 7日目（9月28日）最終日？

9月28日（金）朝は霧。本日は帰国日です。早朝4時に起床し、5時にホテルをチェックアウトしました。趙氏が運転するバスで、西安空港に向かい、空港の入口にて、趙氏に最後の挨拶をしました。6日間、安全運転に努めていただき、本当に感謝します。



餃子宴と柳田夫妻

黄氏には、空港の出国カウンターの手前まで見送りに来ていただき、そこで最後の挨拶をしました。300キロ以上離れた山西省太原市からわざわざ西安に来ていただき、念入りな下調べをした分かりやすいガイドをしていただき本当に感謝します。

出国カウンターを抜け、待合ロビーにて、我々は驚愕の事実を知ることになります。我々が搭乗する成田空港行きのMU522便は霧のため、出発が当初の7時30分から13時頃に変更となったようです。我々はすでにセキュリティチェックを受けた後のため、後戻りできず、この時点で7時間近く待つことが決定しました。周りは、気紛れで開店する商店しかありません。また、東方航空職員からは、青島経由関空行きの便（大阪組の搭乗予定の便）であれば、振替可能であるとの案内がありました（ただし、関空到着後の日本国内の移動は自己負担）。関空到着が深夜であるため、結局当日中に関東に帰ることができないので、振替手続きをするものは皆無でした。

12時になり、東方航空より、弁当が支給され、食事をしていたところ、何か見覚えがある人影がありました。近づくと、大阪組の浪花さんと榎野さんでは、あ～りませんか！！

2人は空港に来る途中で、黄氏より成田空港行きの便は遅れていると聞いていたようでありましたが、まさかこんなに遅れているとは思っておられず、その驚きの表情は計り知れないものでありました。昨晚、「機会があったら再会しましょう」と言ったばかりなのに、その機会がこんなに早く到来するなんて、夢にも思いませんでした。

関空便の出発まで2時間ばかり、談笑した後、大阪組の2人とは二度目のお別れの挨拶をしました。ちなみに関空便も若干遅れていたようです。

関空便が出発した後、周りは賑やかな大阪の方々がいなくなったため、急に静かになり、しばし、成田空港便を待つことになりました。この時点で、

13時が過ぎ、約束の出発時刻が15時頃に延長されました。

しかし、約束の15時頃になっても、搭乗の案内はなく、航空会社からの情報提供もないまま、時間が過ぎ去っていきました。それにしても、情報がないのは、本当に困ります。また、航空会社の職員も若い者がたまに来るだけで、管理職らしき者は現れません。そのような中、この便に搭乗予定の日本の某H旅行会社の女性添乗員（日本人）が航空会社の係員に対して、流暢な中国語で詰め寄っていたが、係員は「私は下っ端なので何も分からない」という態度でありました。それにしても、あの様にクレームを言えるまで中国語ができるなんて大したものでもあります。また、この添乗員の方は、航空会社の方とやり取りをしていた上、某社のツアーに参加していない我々に対して、情報提供をしていただき、本当に感謝しています。いつかは某H社のツアーを利用してみたいです。

結局、我々は17時過ぎにようやく、MU521便に搭乗することができました。朝6時に待合室に到着してから、同じ場所で11時間過ごしたことになります。MU521便は17時半すぎに西安を離陸しましたが、本日中に成田空港に到着することはできないため（成田空港は23時以降離発着禁止）、途中の上海までの便と変更となりました。ここで我々の帰国は1日延長したことになります。

後で判明したことでありますが、MU521便は、前日に成田空港を出発したMU522便の折り返し



思わぬ再会！！

便であり、西安空港に着陸するはずが、霧のため、武漢空港への着陸となったそうです。武漢から西安まで機材を回送することができず、代わりに機材を探していたため、時間がかかったようです。

20時に上海到着後、我々は航空会社から600元のお小遣い（迷惑料かな？）と、浦東空港近くのホテルの提供を受けました。22時頃に、ホテルに到着し、この日の長い日程は終了しました。非常に無駄な一日を過ごし、大して動いていないが、何か疲労が甚だしかったです。もう少し早くに飛行機が飛ばないことが分かれば、西安観光を楽しめたはずです。お小遣いの600元は使うところがなく、そのまま日本に持ち帰りました。次回の旅の資金にします。

★8. 8日目（9月29日）本当の最終日

9月29日（土）、晴れ。朝6時にホテルを出発し、浦東空港に向かいました。今日は何もトラブルがなく、無事帰国できることを祈るばかりです。6時半頃に、空港に到着し、我々が搭乗するMU523便には、遅延やキャンセル等の表示がなく、ひとまず安心しました。

8時20分に搭乗し、9時に上海を出発し、予定通り成田空港に13時に到着しました。14時には空港近くの駐車場より、私の車で出発し、東関東道、首都高速、東名高速を経て、柳田夫妻を無事ご自宅にお届けし、私は16時半すぎに自宅に到着しました。

これにて、我々東京組の7日プラス1日の旅行は終わりました。

この旅行を振り返れば、いろいろなトラブルがあったが、普段足を踏み入れることができないところに行け、貴重な体験ができたと思います。非常に多くの方々に助けられ、他人のありがたみをひしひしと感じた1週間であります。

今回掲載の写真も全て浪花氏からのご提供によるものであります。ありがとうございました。

皆様ご精読ありがとうございました。（完）

‘わんりい’活動報告

〈2019‘わんりい’新年会・シュワンヤンロウで新年を祝おう〉

2019年2月3日（日） 場所：麻生市民館・料理室

今年も‘わんりい’恒例の新年会「シュワンヤンロウで新年を祝う会」が賑やかに開催されました。寺西俊英代表の挨拶、川崎支部長の山田賀世さんの乾杯の音頭で今年もスタートです。早速、シュワンヤンロウ(羊肉のしゃぶしゃぶ)の鍋を囲んで和やかに交流の輪が広がります。



↑ 開会の挨拶をする寺西俊英代表
→乾杯の音頭は川崎支部長の山田賀世さん

↑1年に1度この新年会で顔を合わせる人も多く、話に花が咲きました。



後半の余興タイムでは、佐藤紀子（張怡申）さんと庄琳娜さんの二胡演奏2曲、1曲目は中国で今人気の曲「萍聚」、2曲目は李清照の「如夢令」です。漢詩の会講師の植田先生の李清照と「如夢令」の詞の解説のあと、参加者全員で歌いました。実は新年会の10日ほど前に、佐藤さんをお願いして、何人かで集まって「如夢令」の歌の練習をしたのです。新年会当日、その人たちのリードで歌えればいいな

あとと思ったのですが、ちょっと難しかったようです。飛入りの和田宏さんの歌も拍手喝采でした。

昨年同様花岡風子さんの美しい中国語の漢詩朗読は心地よく耳に響きました。

ビンゴゲームも皆さん楽しんでいるようでした。最後は高島さんの手締めで今年の新年会は幕でした。

漢字の天才

栗生将信

'99年夏、共同通信社編集委員を辞め、韓国・ソウルの下宿から西江大学校韓国学センターに、1年間、学んだ。日本に最も近い外国の言葉を学びたかった。下宿のアジュマ(呼称、既婚女性への親しみと敬意を表す)から、大学の講義では得られない、暮らしの習わしを教えてもらった。体の不調を訴えぐずる子に、母親はお腹や背をさすってやりながら優しく言う。「オンマ(お母さん)の手は薬の手よ」と。

全州市の小学2年生、朴憲君は漢字能力検定試験で難関の1級にパス。「朝鮮日報」の記事を見て、朴君の通う小学校長を通じて彼と文通を始めた。便りにはいつも旧字体の漢字とングルが入り交じる。父はフリーの写真家、母は専業主婦、妹は幼稚園児の4人家族。マンションに泊まりに行き、初対面の私に朴君は早速、難問を浴びせた。「画数の一番多い漢字は何？」

答えに窮していると、彼は書棚から分厚い「玉篇」を取り出し漢字を指した。龍が上下に2字ずつ並んでいて、これでひと文字だと言う。計64画。「大漢和辞典」(諸橋轍次)には音が「テツ」、訓は「言葉が多い」とある。

※感性、叙情、含羞…、脈絡なくこうした言葉を思い起こす。詩を詠み文をつづり、誰かの胸底に届けたい。産声を上げてから78年。言葉を愛し、そむかれなおのめり込む。私の言葉の旅をオムニバス風に寸描したいとおもっている。

ようこそ！ SAMIRA イラスト館へ



皆さんは、サミラさんのイラストからどんなことをイメージされますか。



‘わんりい’ 241号の主な目次

寺子屋・四字成語(20)魚龍混雑(魚竜混雑) ……	2
論語断片(44)三月不知肉味 ……	3
お爺さん三人の大連旅行(1) ……	4
東西文明の比較(32)元号について ……	6
四姑娘山写真だより(41)女王谷の食べ物(1) ……	8
「漢詩の会」(26)李華の「春行興を寄す」 ……	10
中国の笑話(40) ……	11
海外出張の思い出(帰国に向けて⑫) ……	12
中央アジアのキルギスとウズベキスタンを訪ねて(2) ……	14
陝北の旅・報告そのIV(最終回) ……	17
新年会活動報告 ……	19
コラム「漢字の天才」 ……	20
サミラさんのイラスト館 ……	20
‘わんりい’ 掲示板 ……	別刷